

中国山西省における温泉観光開発

浦 達 雄

I はじめに

1. 研究の背景

現在、中国は急速な温泉ブームを迎えている。2013年現在、中国全土で3,700カ所以上の温泉地が成立し、そのうち、現代的な温泉施設は1,600以上を数える（王永強 2013）。こうした現代的な温泉施設は主に21世紀に入って開発されたもので、今後も増加傾向にある。

ところで、中国において温泉資源が集積するところは、西藏（チベット）・雲南・広東・河北・重慶・湖北・天津・福建・北京・遼寧・海南などの省・市・自治区である（王永強 2013）。こうした温泉資源が集積するところだけでなく、従来、温泉のイメージとは程遠いところで、温泉観光開発が進行している。その好例は山西省である。これまで省内における温泉施設の開発は30カ所に及んでいる¹⁾。2010年現在の調査では、水温21℃以上の温水利用地区は38カ所を数え、これらは温泉集中地区である忻州市など21に及ぶ県市に展開している（王薇 2010）。

したがって、本報告は予察的な研究ではあるが、山西省の温泉施設を事例としてとりあげ、その概要を整理・考察することは意義深いと考え、ここに報告するものである。

2. 研究の目的と方法

研究の目的は、山西省における温泉施設を取り上げ、その開発の概要を報告するものである。今回、山西省の温泉集中地区である忻州市に位置する温泉施設を主な調査対象とした。調査の方法は、野外観察・文献調査・関係者に対する聞き取り調査である。聞き取り調査の対象は温泉施設の経営者・研究者などで、経営者については通訳を通して聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は時間的な制限もあって、概要の把握に努め、詳細な調査は実施していない。実証的な研究については今後の課題としたい。

3. 従来の研究成果

中国の温泉に関する国内における研究は、観光地理学の分野では比較的多い。主に山村順次研究室（千葉大学、城西国際大学）がこれまで精力的に調査研究を進めており、地域事例が充実している（小胡 1999）（王・山村 2000）（小胡・山村・呼格吉 2001）（于 2005）（于・山村 2008）（張・于・山村 2011）（于 2013）。

山村研究室以外の研究事例として、陳（2008）、王（2010）、鈴木・陳（2010）などの研究事例がある。王（2010）は、中国における温泉利用形態を概説し、山西省における温泉観光開発の実態、さらには中国人の温泉に対する意識などを報告した。

なお、北京市の温泉に関する研究として、前述の陳（2008）、浦（2011 a）、浦（2011 b）、蟹島リゾートに関する研究成果としては鶴島（2007）の事例がある。鶴島は持続可能な発展

のための教育園としての蟹島リゾートについて研究を行った。北京市の小湯山温泉に関する旅行記としては浦（2006）がある。

浦（2011 a）は、北京市における温泉観光開発の概要を述べた後、2000年という比較的早い時期に温泉観光開発を行った北京市朝陽区（金盞郷）の温泉リゾート2軒を事例として取り上げ、その経営状況の概要を把握した。そして、浦（2011 b）では、北京市の温泉集中地区である小湯山を取り上げ、温泉リゾート3軒の経営者に対して聞き取り調査を実施し、その経営状況の概要を把握した。山西省や北京市の温泉に関する旅行記として、浦（2012）、浦（2013）、浦（2014）などがある。

中国で出版された図書として、北京市国土資源局編著（2008）、昌平区小湯山鎮人民政府（2008）、中国温泉旅游協会（2010）、中国温泉旅游藍皮書編集部（2011）、王永強主編（2013）などがあり、色々と参考になる点が多い。

II 山西省における観光地域の動向

1. 山西省の世界遺産

山西省は中国を代表する石炭の産地で、中国では鉱業が発達する省との認識が強い。したがって、五台山など一部の有力観光資源を除いて、観光とは従来無関係な省であった。ところで、山西省の世界遺産としては、古都平遥（1997年認定）・雲崗石窟（2001年）・五台山（2009年）がある。古都平遥は昔ながらの城郭都市がそのまま保存され、雲崗石窟は中国4大石窟の1つ、五台山は中国4代仏教名山として知られる。

山西省は基幹産業としての石炭産業が斜陽化しており、21世紀に入って各地で観光振興による地域の活性化が図られるようになった。以下は、農村観光を中心とした観光地域の動向を整理したものである。

2. 鳳凰山生態植物園

鳳凰山生態植物園は忻州市定襄県に位置し、2001年に開業した（写真1）。経営主体は鳳凰山生態植物園有限公司で、山西省交通部の外部組織である。楊総経理は近くの黄山村の出身で、郷里に錦を飾った形である。彼の専門は植物（特に樹木）で、技能が十分に生かされている。開業準備は10人で行い、当初は赤字経営であった。投資額は1億元（現在、1元は16円程度）、敷地面積は943haと広大で、鳳凰山（海拔1,096m）の山麓に展開している。入園料は45元、園内の遊覧ミニバスを使うとプラス15元となる。スタッフは社員52人、パートは付近の住人など300人を数える。開業前は、1家族1,000元/月の収入だったが、現在では20万元/年に達している。給料は5,000元/月と高い。

園内の樹木は156種95万株、果樹はナツメ・モモ・アンズ・リンゴなど20種83品種4万株が栽培され、全国の生態植物園、そして農業観光モデル地区に指定されている。従来は見学型が主体だったが、体験型として果樹の観光もぎ取り園を2012年に開設した。20元の支払いでスイカ・トマト・アンズ・ブドウなどが食べ放題となり、500g10円で持ち帰りが出る。

園内の中腹に梧桐山荘がある。レストランとホテルが主な施設で、ホテルの部屋数は20で、宿泊代は198元を数える。植物園の中では中核的な施設として機能している。園内の1

つの山頂に王皇大帝を祭る道教の廟がある(写真2)。この廟は第2次世界大戦中に日本軍が破壊したと言われ、植物園開業に際して、楊総経理が再建したのである。

現在、植物園内では観光開発が進展している。ホテルは2カ所で開発が進み、滹沱人家は2014年8月末に仮開業を行った。部屋は50を数え、黄土を利用した洞窟部屋に特色がある(写真3)。滹沱は近くを流れる山西省第2河川の滹沱河から採用している。

温泉酒店は2014年12月末の開業を目指している。ホテル・レストラン・温泉会館(温泉施設)・別荘からなり、その施設は大規模である(写真4)。ホテルは110室、レストランは1,000席を予定している。中核施設の温泉会館は2階建てで、内湯3カ所(写真5)・SPA(8カ所)・サウナ(5カ所)・映画室・休憩室・男女別脱衣場などからなる。

敷地の周辺にはかなりの空き地があり、家族風呂や男女別内湯(裸入湯)、露天風呂(水着着用)を整備する予定で、家族風呂などは日本形式の風呂を計画している。酒店開業に際して源泉を1カ所掘削したが、もう1カ所の掘削を計画している。

3. 紅豆杉溪谷

紅豆杉溪谷は山西省南部、洛陽に近い陵川の郊外に位置する。紅豆杉溪谷(写真6)では、大規模な観光開発を意図し、ホテル・キャンプ場・水遊び場・別荘、そしてロープウェイの建設を計画している。そのスケールは広大である。開発者は石炭産業をベースとした実業家である。もともと溪谷の中に滝や溪流が点在しており、中核を占める小壺口瀑布(写真7)付近は、中国国家地質公園にすでに指定されている。一般の観光客やハイキング客はここが目的地となるが、溪流に沿った段丘などを利用して、さらなる観光開発が実施されつつある。

4. 特色老区文化農業園

特色老区文化農業園は太原北郊の古交市の郊外に位置する。経営者は太原で青島ビールの販売で実績をあげた実業家である。以前に整備した農業園(写真8)を中核として、溪谷や後背地に沿って(写真9)、ホテルやキャンプ場、水遊び場などを新設することで、観光施設の多様化を図る計画である。ここは水質に優れており、霊泉として温浴施設の開発を計画している。

III 温泉地域(施設)の動向

1. 新旧温泉の実態

山西省には、現在、温泉施設の開発が進展し、温泉施設の数約30カ所に及んでいる。2010年現在、水温21℃以上の温水利用地区は38カ所を数え、これらは忻州市など21に及ぶ県市に展開している(図1)(王 2010)。

表1は忻州市を中心とした温泉地の概要である。山西省における近代的な温泉地の開発は1970年代から始まった。その代表的な温泉は奇村で、石炭関係会社などの療養所(いわゆる保養所)が建設された。奇村は1972年の開発で、山西省では初期の温泉開発と言えよう。その後、1993年に頓村、2002年に大营が開発された。

なお、1980年代、1990年代において養殖や灌漑に温泉が利用された。その代表は上湯頭村(忻州市定襄県)などである。さらに、1990年代以降になると、温泉が観光に利用されるよう

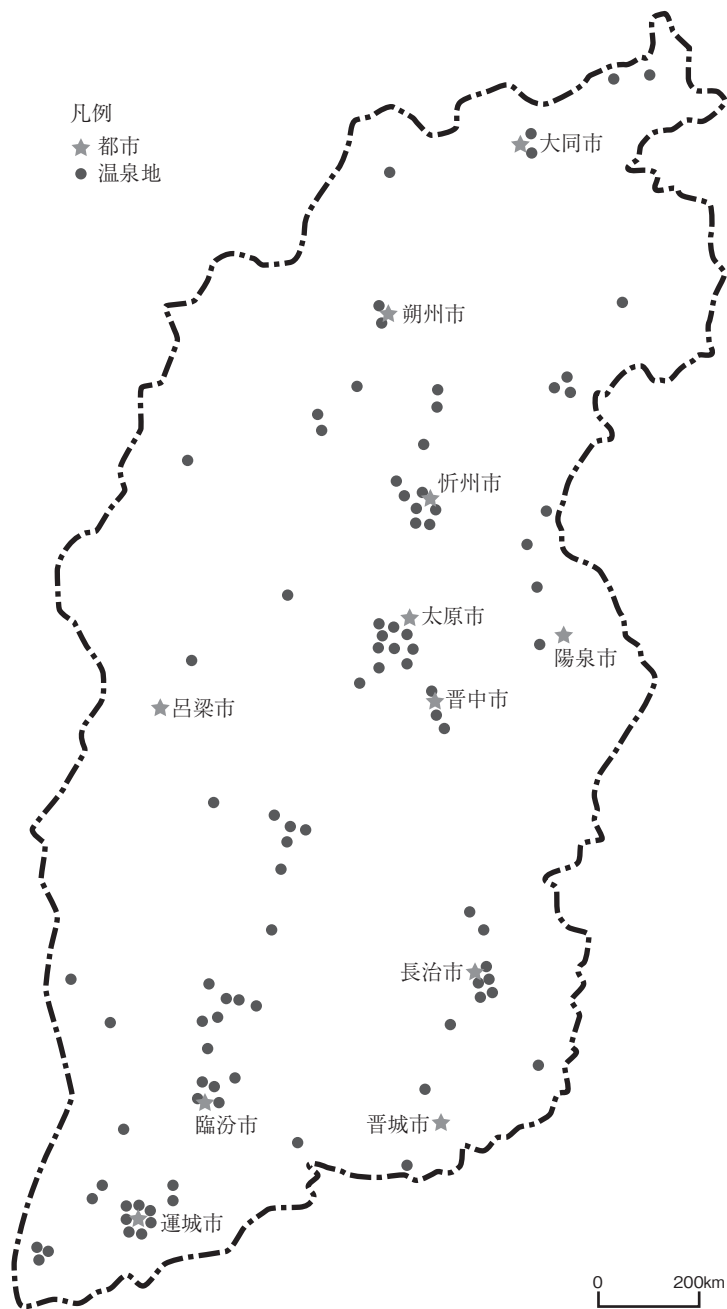


図1 山西省の主な都市と温泉地
 注. 原図は王(2010)による。

になり、頓村や大营が開発されたのである。

2. 大营温泉一泉山荘

一泉山荘は、2002年から整備が進み、日本流に言えば、温泉旅館団地を形成している(写真10)。一泉山荘には旅館棟が全部で34棟あって、1棟当たり2軒が営業している。客室はそれぞれ7室で、現在、20軒程度が営業をしている。いずれも個人経営となる。部屋代は80元、温泉利用は50元である。温泉は団地中央にある源泉棟から各戸が引き湯している(写真

表1 忻州市の温泉施設（2010年）

温泉地	奇村	頓村	大营
開発	1972年 温泉療養院開設	1993年 忻府区政府主導で開発 380万元投資 頓村温泉度假村管理局 1995年営業開始	2002年 大营温泉旅游度假村管理局
源泉	9カ所以上 泉温 43-72℃ ラドン、フッ素、硫化水素、珪酸塩など	8カ所 泉温 43-50℃ ラドン、フッ素、硫化水素、珪酸塩など	1カ所 泉温 57℃ フッ素、ホウ酸塩、珪酸塩、ラドンなど
略史	1978年、改革開放。医療制度変更 1980年代、改革開放政策本格化 療養機能より観光保養機能の充実 1980年代から1990年代、行政機関などの療養院（保養施設）整備	1990年代、主に外部資本による開発 1993年から15年間で9億元投資	2002年から5年間で整備
施設	大型療養・保養施設17軒、室内温泉プール5カ所、公園など。ベッド数は1,100床	ホテル24軒、プール11カ所、多数の民宿を整備	ホテル3軒、貸別荘70軒、温泉プール4カ所
利用客	地方政府や企業の会議客、太原市民が多い 週末は北京ナンバーも目立つ	会議客、観光団体客が多い 2007年、45万人が利用	
その他	温泉資源の乱開発 温泉プールを備えた大型ホテルが多い	収入は1億元 温泉地として特徴がなく、露天風呂の開発を計画している	地元資本による経営が多い

注. 王（2010）により作成。

11)。

一泉山荘には小規模な室内温泉プール（2007年4月1日開業。入湯料20元）があるが、他に観光客が楽しむ施設は存在しない。現在、旅館利用者は炭鉱に勤務する労働者が大半であり、その利用形態はカラオケ・マージャン・マッサージなどである。温泉旅館団地の入口には客引き、旅館のロビーには若い女性がいて、健全な温泉利用とは言えない雰囲気である。

3. 上湯頭村の温泉

上湯頭村は忻州市定襄県に立地する。戸数は約670戸を数える。幹線道路であるS46号線に沿ってかつては養魚場が沢山存在した。温泉は1970年代に定襄県が開発し、その後、80年代でも掘削し、その数は10数カ所を数えた。当時の中国は1964年に提唱された「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ」というスローガンのもと、集団農業の模範として中国政府による政治宣伝活動が行われた。そこで、この村では農業振興の一環として、特色ある村を目指し、養魚場（主に罗非。ティラピア）の整備となったのである。そのうち、養魚場の魚は村の青年が盗るようになって、喧嘩が耐えず、温泉井戸を埋める輩が登場したのである。事態は好転せず、養魚場は次第に閉鎖となった。

その後、源泉を利用して温泉施設が登場した。1985年頃には温泉施設1軒がすでに開業し、さらに数は4~5軒に増加、1989年・1990年のピーク時は7~8軒が営業したのであ

る²⁾。以前に温泉施設を経営した古老の話では、3週間の温泉滞在が流行した。

S46号線沿いには、小院温泉大衆浴・向陽温泉供給駅(写真12)・定襄県白村供電所・鳳凰山粗糧館(写真13)・白村温泉教化院などがある。白村温泉教化院は2009年開設だが、温泉は付帯していない。部屋は44室で5人が滞在している。利用者は元軍人、子供なしなどが条件となっている。定襄県白村供電所では温泉をシャワーとして利用している。鳳凰山粗糧館は2014年に開業した農家レストランで、村長が経営している。特色は18元の自助(食べ放題)の料理である。ただし、建物は再開発のため、取り壊しが確定している。

付近に塀で囲まれた屋敷がある。中には別荘風の建物が点在しているが、入居している様子は見られない。鳳凰山生態植物園の盛衰がこうした施設の盛衰に微妙に影響していると思われる。鳳凰山生態植物園の前の路上では、果物を販売する農家の人々が登場している。施設の開発は村人に雇用や就業の機会を与えており、施設の開発は好影響を与えている。

4. 小院温泉大衆浴

小院温泉大衆浴は、現在、上湯頭村では地元民が経営する唯一の温泉施設である。開業は1998年冬で、買収開業である。経営者夫妻の元の仕事は農業で、温泉は県のもの(地下120mから湧出)を利用し、右隣の向陽温泉供給駅から引湯となる。温泉には29の元素が含まれている。入浴の適応症はリュウマチや皮膚病となる。

開業動機は働きがい、村人の為で、開業当初は村人を無料で招待した。キャッチコピーは「神泉経水、養生健体」である。客室は四合院造りで整備され、庭の回りに温泉付帯の客室7室(写真14)、温泉無しの客室は5室を数える。その他、裸入湯の大浴場が1カ所ある(写真15)。2014年夏からフロントの部分に食堂を付帯し、利用者に対応している。

利用客は1日20人~30人で、徒歩・バイク・自家用車で来湯している。部屋利用は1泊は80元、休憩は50元、大浴場(5人以上)80元を示す。宿泊客は車利用のビジネス客が多い。

5. 如金生態園

如金生態園は、太原市南郊の交城県に位置する。開業は2014年6月で、石炭機械メーカーが経営している。敷地は大半が山林で1,300haを占め、木材の販売も行っている。人工掘削した温泉は地下1,100mから湧出し、38℃と温度は低い。温泉施設は室内型で、プールを中心として回りに小規模な露天風呂がある。温泉利用料金は58元と安い。近くに日本人観光客が訪れる玄中寺(浄土宗)もあって、今後の展開が注目されよう。

6. 大炭温泉

大炭温泉は陽泉市孟県に位置する。陽泉市孟県は太原市の東郊、河北省に近接している。開業は2014年5月8日で、経営者は実業家となる。敷地面積は6,700haと広大で、建物はホテル・レストラン・温泉施設などからなる。ホテルは300人収容だが、レストランは1,000席、温泉施設のロッカーは2,000と多い。温泉施設はプール・大小の露天風呂などからなる。平日の利用は100人~200人だが、週末は2,000人を超えることになる。通常の利用料金は200元で、大型施設として今後の展開が注目されよう。

IV 新興温泉としての神湯都温泉楽活園

1. 施設の概要

神湯都温泉は上湯頭村のS46号線沿いに立地し、山西省の第2河川である滹沱河の左岸の河川敷に位置する。経営は鳳凰山生態植物園有限公司で、鳳凰山生態植物園付帯の温泉・宿泊施設として開発が行われた。仮の開業は2013年6月16日、正式開業は7月4日である。広大な敷地内には、温泉・宿泊・レストラン棟、室外に露天風呂エリアがある。主な付帯施設は客室・温泉施設・レストラン・マッサージルーム・休憩室・会議室などである。室内温泉の中心は水遊び場（室内プール）（写真16）で、それを囲むようにして室内風呂が10ヵ所近く点在している。レストランには宴会場（個室）を整備し、接待客を意識した構図である。

室外では各種の露天風呂が楽しめる。一般的な露天風呂から寝湯（写真17）・打たせ湯・岩盤浴・ドクターフィッシュなどがある。ただし、広大な露天風呂（写真18）は排水の問題もあって、まだ未利用の状態である。温泉の営業時間は7時から24時までとなる。

入浴料金は118元（大人）で、鳳凰山生態植物園とのセットで168元となる。開業当初、利用客は植物園に来たついでに温泉施設に立ち寄ったが、現在では形勢が逆転している。

客室は39室を数え、内訳はツイン21・トリプル2・ダブル5・ビジネス10・VIP1室となる。標準料金はツイン398元・トリプル498元・ビジネス1,208元などである。

施設設計の意図は随・唐の時代に求め、皇帝の館をイメージしている³⁾。その理由は、615年、隋の時代に皇帝である煬帝が当地で沐浴したとの言い伝えが残されており、それを意識して、施設名などを考案したのである。さらに合わせて海南島をイメージし、南洋の樹木を配列している。柱は樹木で隠して雰囲気を高めている。投資額は2,000万元を数える。当初の計画では、高品位客・接待客の入り込みを意識したが、中央政府による贅沢禁止・接待抑制の命が出て、政府や企業の接待向けから一般大衆向けの施設として出直すことになった。

神湯都温泉楽活園には、神湯都温泉養生研究院がある。2013年5月20日に開院し、院生は研究班と実践班とに別れ、実践班は施設の実務スタッフとなる。実務スタッフは96人からなり、その内、学生のインターンシップ生は10数人を数える。温泉施設の雇用は近隣の村から行われ、植物園と共に地元にとって開業の効果は計り知れない。給料は1,000～2,000元程度で、清掃スタッフは600元となる。研究院は2014年1月から組織替えを行い、温泉の管理・運営から手を引き、純粋に温泉の研究に携わることになった。現在のテーマは、温泉水の飲用、温泉と医療などで、日本留学（博士。温泉地域政策専攻）帰りのスタッフが院長となり、持続可能な研究・調査に努めている。近々、日本の温泉地域の専門家を顧問として迎える予定である。

源泉は現在4ヵ所を数える。内訳は開業前に河川敷で掘削した1号泉（地下100m、湧出量216L/m、62℃）、河川敷の2号泉（140m、300L、55℃）、植物園の駐車場にある3号泉（100m、少量、30℃）、山腹の4号泉（280m、大量、49℃）となる。1号泉は日本の中央温泉研究所で分析を行い、四万温泉の泉質に類似しているとの評価を得た。泉質は日本流に言えば「ナトリウム・カルシウム-硫酸塩・塩化物泉」に該当するとされている。

2. 利用客の動向

温泉施設のロッカーは400なので、定員は400人となる。ただし、回転率が高まれば、利用人員は増えることになる。共産党の幹部からは1日5,000人の入浴を目指せと言う指導を受けたが、ロッカー定員からみると、無理な話であろう。

開業当初、2013年7月の売り上げは16万元、同8月は26万元で順調に売り上げを延ばした。その目標は1日500人程度、売り上げ高は1週間80万元、1ヵ月320万元である。その後、2013年の国慶節（10月1日～7日）では1日当たり約300人、2014年の春節（旧正月）（1月31日～2月6日）では同約500人、清明節（4月5日～7日）では同約500人、労働節（5月1日～3日）では同1,000人超えを達した。

現在の温泉施設の数値目標は3,000人/月である。以前は10人～20人/平日、100人程度/週末の利用だった。現在ではそれぞれ50～100人/平日、400人～500人/週末を目標とし、着実に成果を上げている。

温泉利用客は近くの都市から車で来るパターンが大半で、原平市・忻州市・太原市からが多い。主な客層は30歳代・40歳代の子連れ（主に幼児と小学生）の家族客や友人・知人のグループが目立つ。宿泊客は太原市から70%を占める。現在の宿泊客の傾向として、地方政府の公務接待（主に1泊）、企業の学習会・研修会（主に3泊）、裕福な夫婦・家族連れ（主に1泊）などが宿泊している。温泉利用と宿泊は国家の特定の記念日や週末に集中する傾向になる。

3. 課題

ホテルの付帯施設として、個室の家族風呂（裸入湯可能）（5ヵ所）を整備したが、排水の問題もあって、開業に至っていない。設計当初からの問題であり、早急に改善すべきであろう。河川敷に立地する大露天風呂も同様である。やはり排水問題だが、規模があまりにも大き過ぎるので、当初から問題と言えよう。設計変更を再度行って、露天風呂の回りを水辺の歩道に改良すれば、問題の一部が解決されよう。河川敷は湿地帯であり、動植物が豊富で子供の教育にも最適となろう。

ホテル部門では、バス・トイレなどの世界基準化が課題である。バスタブは無く、いずれもシャワーである。しかも、シャワーとトイレの区別がなく、シャワーを浴びれば、付近が水浸しとなる。温泉施設の場合、水着の水切り機が欲しい。濡れたままの水着は乾燥しにくいので、こうした細かな配慮が大切となろう。さらには、外の露天風呂の清掃である。利用客は食べ物を持ち込み、ゴミを散らかす傾向にある。清掃担当者は決められているが、お互いに面子があって、なかなか他所の部門に対して注意は出来ない。今後は面子よりもビジネス優先だと思いが、ここでは日本流の考え方は通用しない。

V ま と め

中国山西省の温泉地域や温泉施設を対象として、温泉観光開発の実態について予察的な把握に努めた。その結果、次のように整理することが出来よう。

①石炭をはじめとした鉱業のイメージが強い山西省だが、1970年代から温泉観光開発が進展している。

- ②山西省には30カ所を数える現代的な温泉施設が開発され、近年、大規模な温泉施設が登場している。
- ③温泉施設はプール（水遊び場）が中心で、これの回りに大小の露天風呂が展開している。いずれも水着着用で、日本のような裸入湯の仕組みはない。
- ④温泉は泉質重視ではなく、温泉水を利用した単なる遊び場（遊泳プール）であり、じっくりと温泉に浸る習慣はない。
- ⑤温泉利用客は裕福な家庭の人々が多い。中央政府による官官接待禁止命令、贅沢を戒める達しが出たが、ベースとしてはこうした需要はいまだに残されている。
- ⑥日本では浴槽に対して清潔さが求められるが、中国では小さなところに拘らない。利用客は浴槽の回りで飲食を楽しむ傾向にあり、ゴミが散らかることも多い。これは担当の係りが清掃をすればすむ問題だが、係りが気づかない（気づかないふりをする）場合はそのままとなる。
- ⑦浴槽に漢方薬などを入れる薬湯が人気だが、これは本来の温泉成分を失う可能性が大きい。
- ⑧中国人は面子、つまりプライドの強い民族だが、ビジネスに面子は必要ない。観光産業はホスピタリティ、つまりおもてなし産業であり、顧客本位の経営が求められよう。
- ⑨個室浴場では先客のゴミがゴミ箱に入っており、これは日本では信じられない。
- ⑩いずれにしても日本同様に裸入浴のシステムを導入し、心身共に癒して欲しい。
- ⑪現在の中国では、大規模な温泉施設の開発がブームだが、いずれは日本同様に終焉を迎えることになるだろう。大規模施設だと、バブル時代の日本と同じような金太郎飴の開発であり、何処でも画一的な施設となって、個性や魅力が感じられない。さらに温泉はいまだに水遊びの場としての感覚で、これを克服する必要がある。
- ⑫日本の秘湯や癒し系の温泉のように、優れた自然環境の中で、泉質重視で「5養」（静養・休養・保養・療養・滋養）が楽しめる温泉をいま中国で求めたい。

付記

本稿を作成に当たり、朱専法教授（山西大学旅游学院）、王薇院長（神湯都温泉養生研究院）から情報提供と助言を頂きました。また、楊天平総経理（楊鳳凰山生態植物園有限公司）をはじめ、スタッフの方々に色々とお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

参考文献（発行順）

- 小胡日查（1999）「中国内モンゴル阿爾山温泉地の形成と利用実態」千葉大学地理学研究報告・10号、41～50頁。
- 王 艶平・山村順次（2000）「中国における温泉利用の変化と地域的特性」千葉大学環境科学研究報告・25巻、44～49頁。
- 小胡日查・山村順次・呼格吉勒図（2001）：「中国内モンゴルにおける温泉資源の特性と温泉地開発－涼城温泉を中心として－」千葉大学環境科学研究報告・26巻、18～26頁。
- 山村順次・王 艶平（2001）「中国南部における温泉地の地域的展開」千葉大学地理学研究報告・12号、1～11頁。
- 于 航（2005）「中国遼寧省鞍山市湯崗子温泉の発達過程と温泉利用」千葉大学地理学研究報告・16号、31～42頁。
- 于 航・山村順次（2005）「中国大連龍門湯温泉の開発と温泉利用」温泉地域研究・5号、31～40頁。
- 浦 達雄（2006）「湯遍路旅日記－北京・小湯山温泉」温泉（日本温泉協会）第74巻6月号（通巻800

- 号)、4~9頁。
- 鶴島陽子(2007)「『北京・持続可能な発展のための教育園』における教育活動」国立教育政策研究所紀要・136集、175~184頁。
- 于航(2007)「中国大連市安波温泉の開発過程」温泉地域研究・9号、31~40頁。
- 于航・山村順次(2008)「中国大連市安波温泉の開発に関する地域住民の評価」温泉地域研究・10号、63~72頁。
- 陳晶(2008)「中国の北京市と広東市における温泉施設の一考察」温泉地域研究・10号、85~90頁。
- 北京市国土資源局編著(2008)『北京地熱』中国旅游出版社、109頁。
- 昌平区小湯山鎮人民政府(2008)『小湯山中国温泉之郷』同政府、1冊。
- 鈴木晶・陳曄(2010)「桂林龍勝温泉観光開発のSWOP分析及び対策」温泉地域研究・15号、29~36頁。
- 中国温泉旅游協会(2010)『中国温泉旅游精選』広東旅游出版社、315頁。
- 王薇(2010)「中国における温泉観光地の開発」地域政策研究(高崎経済大学地域政策学会)、13号、23~38頁。
- 中国温泉旅游藍皮書編集部(2011)『中国温泉旅游産業発展報告2011』中国温泉旅游協会、244頁。
- 張楠・于航・山村順次(2011)「中国遼寧省湯泉温泉の開発と利用」温泉地域研究・16号、31~42頁。
- 浦達雄(2011a)「北京市における温泉観光開発」温泉地域研究・16号、43~50頁。
- 浦達雄(2011b)「北京市小湯山における温泉観光開発」温泉地域研究・第17号、13~22頁。
- 于航(2013)「中国・湯崗子温泉の発達過程と保養・療養利用」温泉地域研究・第20号、129~136頁。
- 浦達雄(2013)「URAの湯遍路旅日記2012-北京・山西省・チェンマイに行く」観光&ツーリズム(大阪観光大学観光学研究所・所報)・第18号、18~31頁。
- 王永強主編(2013)『温泉 旅游理論、実践与案例研究』旅游教育出版社、188頁。
- 浦達雄(2014)「URAの湯遍路旅日記2013-中国・タイ編-」観光&ツーリズム(大阪観光大学観光学研究所・所報)・第19号、11~21頁。

注

- 1) 朱専法教授(中国山西大学旅游学院)の談による。
- 2) 小院温泉大衆浴の主人の談による。
- 3) 設計を担当した温氏の談による。



写真1 鳳凰山生態植物園(看板)



写真2 王皇大帝の廟



写真3 洞窟部屋



写真4 温泉酒店の全景



写真5 温泉会館の内湯



写真6 紅豆杉溪谷の入口



写真7 小壺口瀑布の景観



写真8 特色老区文化農業園



写真9 特色老区文化農業園
(後背地)



写真10 一泉山荘(旅館棟)



写真11 一泉山荘
(客室付帯の温泉施設)



写真12 向陽温泉供給駅



写真13 鳳凰山粗糧館



写真14 小院温泉大衆浴
(個室温泉)



写真15 小院温泉大衆浴
(大浴場)



写真16 神湯都温泉
(室内プール)



写真17 神湯都温泉(寝湯)



写真18 神湯都温泉
(広大な露天風呂)